

# 批評オフ vol.2【serial experiment lain を語ろう☆の回】

作成日時：6/2(日) 作成者：デラ@あきひと

1. 物語理解（アンケート結果等）
2. 作品の面白さは何に起因するのか（まどか☆マジカとの類似性に関する指摘、4象限図式の精緻化）
3. [+α]各場面理解、その他作品との類似性

## □1. 物語理解（①概要→②アンケート内容）

### Q1: real と wired という素朴な二項対立の図式は最終的にどのように変化したか？

複層的な世界（real と wired の境界が曖昧な形で維持され続けて存在する世界）のありようを示唆するかの話。具体的には、以下の0段階→4段階にレイヤーが積層し、現実が多層なものとして現れ続けることが示唆される。

#### 図表 a : lain における「複層的な」世界

- 0段階：realのみ
- 1段階：real→wired（\*デバイス経由） cf. ナビでメール送信
- 2段階：wired（or 匿名なreal）→real cf. 千沙からのメール。
- 3段階：real↔wired cf. レインの高スペックなCPUの製作により、wiredにフルダイブで接続可能に。
- 4段階：real～wired cf. アプリケーションの発動?全てが書き換え可能な現実になる。

### Q2: 「lain」（岩倉玲音、れいん、レイン、lain）はいかなる存在として描かれたか？

図表 a の各層に対応した形で各々の「lain」の姿（存在）も分類することが可能である（以下：図表 2 を参照）。0段階の「玲音」は、元来「(wiredに) 遍在していた記録」(=lain)であったものを「玲音」として人格化し、家族や友人というアプリケーション（付属品）を与える事で、realに繋留するようになった存在であった。このように、「玲音」がwiredに遍在する存在としての「lain」に回帰していく話として本作品を見ている（0→4段階に回帰する話）。

#### 図表 b : 各層と対応する「lain」の姿

- 0段階：岩倉玲音
- 1段階：れいん（cf. メールの宛先）
- 2段階：レイン（cf. そっくりな私の目撃談、玲音のもう一つの人格）
- 3段階：lain（cf. 姿形が似ている別の存在としてのlain）
- 4段階：lain（cf. wiredの成立以前から存在していた神が玲音の姿を通じて現前している。）

### Q3: 「玲音の部屋にて増えていく機械類の捻出源は？」(yu-ki)→当日議論

## 批評オフ vol.2【serial experiment lain を語ろう☆の回】

---

Q4: 「2話でサイベリヤに現れたもう一人の玲音は何者か？」 (yu-ki) → 当日議論 (Q2 と関連)

Q5: 「lain と英利正美との関係について」 (yu-ki) → 当日議論 (Q1, 2 との関連)

Q6: 「ワイヤードからデバイスなしで現実に干渉できるようになった際に、「電線のない世界に行く」という考え方と、フラクタルの中で登場する革命分子の作る理想郷の類似性について。」 (aki) → 当日議 (支配の在り方と、支配領域から逸れる)

Q7. 「ゲーム版の lain とアニメ版の lain の関係性」 (dama) → 当日議論 (コンセプトの類似性)

### □2. 作品の面白さは何に起因するのか (まどか☆マギカとの類似性に関する指摘、4象限図式の精緻化)

■lainの面白さを指摘するには、前回の批評オフ(「まどマギ回」)の議論を参照して、両者に共通してみられる点を指摘するのが良いと思います。

■まどマギでは、私たちの身近な社会を生きていた主人公が、異なるリアリティを持つ「社会」の存在(cf.魔法のいる世界)に気づき、同時にそれが依って立つ「世界」の法則(cf.エントロピーの法則)に直面します。

■まどかは絶望の後に死んでいった仲間のために、最後まで希望を捨てずに、魔法少女が絶望しない異なる秩序の世界や社会を作ることになります。

■前回の批評オフで指摘した、「まどか☆マギカ」の面白さとして、個的な利益(cf.友人や家族)を守る為に、現実の秩序それ自体の変更を行った点があります。「serial experiments lain」の面白さも同様の点にあると思います。

■玲音も、ワイヤードからデバイスが解放され、リアルがワイヤードに従属するような世界が到来した際に、リアルに生きるありすとの絆を守る為に、現実の秩序の再編成を行います。

■玲音は友人のありすの為に、wired→realへの干渉を可能にし、人々の記憶の書き換えが可能になります。しかし、その行為により、realがwiredに従属され、英利による統治社会が到来してしまいます。\*1(cf.黒服のMIBは記憶を操られ、殺される。)

*\*1)このへんは、伊藤計画『ハーモニー』もしくは、「フラクタル」的な統治の世界を彷彿させます。統治から逃れる為には、ワイヤードが干渉できない「電線のない世界」に行くしかありません。*

■玲音はその計画を白紙に戻す為に、人々の記憶から玲音の存在を消し、英利が野望を抱かない世界線に移動します。最後の問題は、玲音自身の自我でした。世界を白紙に戻した後に、玲音の自我は行き場所を失います。しかし、玲音は人々とこれからの記憶を築いていく事で新たな生を紡いでいくことを決意します。リアルに生きるありすとの絆と、社会の安寧と、最後に、玲音の(持ってしまった)自我も救済される描写であったと考えられます。

■主人公が「生まれなかった」世界を彼女自身が「生きる」描写という点で、「まどか☆マギカ」と再度接合点を見出す事が出来ます。

・まどかの「やっと会えたね」(ラストシーンのほむらとの会話)に、  
玲音の「はじめましてだよ」(ラストシーンのありすとの会話)。

・まどかの「これからはずっと一緒だよ」に、  
玲音の「私はここにいる、だから、私はどこにでもいる」

の台詞が重なります。

## 批評オフ vol.2【serial experiment lain を語ろう☆の回】

---

### ■【まとめ】

プロセスは違えど、まどかと玲音は似た形での解決策を実行した点。また、最終的に主人公が水子のごとき存在となったという点で、両作品の類似性が指摘できるのではないだろうか。

## □3. [+α]各場面理解、その他作品との類似

アニメに限らず物語全般の評価の為の基準を模索中です。現在着目しているのは、作品の各登場人物の行動原理を2つの軸から整理する作業です。

x 軸：「社会⇄実存」

y 軸：「現実調和度-高⇄低」

まどか☆マギカや lain では、実存的でありながら、現実調和度の高い決定を主人公が行っている点で「興味深い」と述べてきました。

\*\*\*\*\*

### ■内容

これまでの作品は個的な利益をかけて、世界の矛盾と格闘したり（=時をかける少女）、折り合いをつけたり（=steins gate?）する話が多い。しかし、まどか☆マギカでは各魔法少女により、これらの限界が示された。

さやかや杏子らは秩序との格闘の末、負けて、ほむらはタイムループの末、最適解に至るが、その結果が意図せざる結果を招き、絶望の淵に立つ。このように「まどか☆マギカ」では、タイムループにより、現行の秩序の中での最適解の限界が示される。

それを受け、まどかは友人や他の魔法少女たちのために世界の均衡点を変えず、均衡を保つ為の要素やその布置連関を変更することで、現実調和度の高い&実存的な決定を叶え、「結果として」、それは社会の安寧にも寄与した。

### 図表 c: 『まどか☆マギカ』当初の4象限図

現実調和度-高

↑

↑ ☆杏子

社会 ←← →→ 実存

☆まみ ↓ ☆ほむら

☆さやか ↓

低

## 批評オフ vol.2【serial experiment lain を語ろう☆の回】

---

図表 d: 『まどか☆マギカ』 8 話以降の 4 象限図

現実調和度-高

↑ ☆まどか

↑ ☆ほむら

社会 ←← →→ 実存

☆まみ ↓ ☆杏子

☆さやか ↓

低

\*QB にとって、まどかとの契約の為に、さやかや杏子が死ぬ事も折り込み済みであったとすれば各々の行動や存在の現実調和度はアイロニカルな形で上昇する。

### ■整理

#### 【社会⇔実存とは】

- 社会的な決定とは他者／集団にとって都合の良い決定を行う事である。
- 反対に、実存的な決定とは本人にとって都合の良い決定を行う事である。

#### 【現実調和度（高⇔低）とは】

○現実（世界）の物理法則に沿った形で決定を行っているか否かで、調和度の高低が測られる。